

Ⅱサムエル 10 章「ふさわしい対応」

自分の対応を振り返って、ふさわしかったのだろうかと思ひ悩むことがあります。人に相談したり、経験を通して学んだりすることもあると思いますが、私たちは聖書の中から学ぶことができます。

1. ハヌンの仕打ち（：1～5）

アンモン人の王ナハシュが死に、その子ハヌンが代わって王となったことをダビデは知りました。それで「ナハシュの子ハヌンに真実を尽くそう。彼の父が私に真実を尽くしてくれたように」と言いました。メフィボシエテに真実を尽くしたように、ハヌンにも真実を尽くそうと考えました。神の恵みを受けた者は、神に感謝して、また倣って、他者に真実を尽くすことに導かれます。

Ⅰサムエル 11 章によるとナハシュはサウルが王になったばかりの頃に、ヤベシュ・ギルアデに攻めて来て、ヤベシュの人々が契約を結ぶことを求めると、皆が右目をえぐり取ることを条件にと言いました。その時はサウル王がアンモン人を討ち、ヤベシュ・ギルアデを守りました。

そのようなナハシュがダビデに真実を尽くしてくれたとは、ダビデがサウルに追われていた時に、何らかの助けを与えてくれたのか、ダビデが王になって以来、イスラエルとアンモン人が友好関係を保ってきたことなのかもしれません。いずれにしても、ダビデとナハシュの関係は、ヨナタンとの関係のようではなかったはずです。それでもその子ハヌンに真実を尽くそうとしたダビデの考えには甘さがあったのではないのでしょうか。

ダビデの使者たちがやって来たことを聞いたアンモン人の首長たちはハヌンに言います。3 節。ダビデの思いが通じませんでした。彼らはダビデに対して警戒していました。ダビデを疑った首長たちのことばを受け入れ、ハヌンはダビデの家来たちを捕らえて、屈辱的な仕打ちを行いました。王から遣わされて来た使者を辱めることは、明らかに外交関係を断絶することです。

このように、ダビデのハヌンに対する善意は通じませんでした。真実を尽くそうとしたのですが、相手に受け入れられませんでした。信頼関係が築かれていないのに、一方的に好意を表した場合には、良い結果につながらないことがあります。純粋に真実を尽くせば良いということではないでしょう。相手との関係を見極める必要があるでしょう。

それと共に、神の恵みを素直に受け入れない人たちがいることを思うと、真実を尽くしても受け入れられない経験を通して、神の痛みを少しでも味わうことに導かれているように思います。また、神に背を向けている者に対して、それでも神は恵みを施してくださる恵み深いお方です。その神の恵みに倣って、真実を尽くすことをやめてはならないことも教えられます。

2. アンモン人との戦い（：6～14）

アンモン人は、ダビデの使者たちを辱めて送り返したので、ダビデに憎まれるようになったと承知していました。戦いになることを分かっていたのでアンモン人は傭兵を雇います。6 節にあるように、ベテ・レホブとツォバのアラム人、マアカとトブの人たちを雇います。これらの 4 つはヨルダン川の東側の北部とガリラヤ湖より北の町や王国です。今のシリアの地域にありました。

ハヌンは、ダビデを警戒して疑うことから出た間違った忠告を受け入れたために、戦いに向かっていきました。そうなる前に、忠告を吟味する必要があったでしょうし、ダビデの使者たちに誠実に向き合うべきだったでしょう。ハヌンは自分たちの過ちに気づけなかったのでしょうか。そうだとすると、好戦的な態度よりも、交渉する態度を持つべきだったでしょう。

私たちにも、自分の過ちを認めて謝罪し、相手の怒りを宥めようとするよりも、自分を正当化し、自己防衛で対応してしまうことがないでしょうか。自分を守ろうとして戦うのではなく、自分を捨てて平和をつくるように求めるべきです。それが主イエスの十字架に向かわれた歩みでした。

アンモン人が戦いの準備をしているとの情報が入り、ダビデは將軍ヨアブと全軍をアンモン人の国に送ります。アンモン人の軍勢は首都ラバの町の門から出て来て、戦いの備えをしました。アンモン人が雇ったアラム人の傭兵たちは彼らだけで町から離れた野にいました。ヨアブとイスラエルの軍勢はそのことを知らずに、アンモン人の町に向かったので、アンモン人とアラム人の間に挟まれてしまいました。

それが分かったヨアブはすぐに対応します。軍勢を二つに分けます。イスラエルの精鋭全員からさらに兵を選び、その精鋭たちをヨアブが率いてアラム人に立ち向かう陣備えをしました。もう一方の軍勢を弟のアビシャイに任せて、アンモン人に立ち向かう陣備えをしました。そして、ヨアブはアビシャイに言います。

11～12 節。もしどちらかの軍勢が劣勢になったら、もう一方が助けに行くことにします。そして、ヨアブは大切なことを語ります。まず、「強くあれ。…奮い立とう」と言います。自分たちの全力を尽くして戦うことを決意します。それだけでなく、「主が、御目にかなうことをされるのだ」と言います。神、主がみこころを行われることへの信頼を言い表し、主に委ねます。

神への信仰と、自分たちの全力を尽くすことの両方が必要だということです。信仰と人の努力は相容れないものではありません。ところが、どちらかだけを強調することがあります。信仰を強調するあまり、行いを顧みないことがあります。逆に、行いを強調するあまり、信仰を軽んじることがあります。しかし、信仰者の歩みには神への信仰と自らの努力のどちらも必要なのです。

詩篇 127 : 1。このみことばも同じ信仰の態度を教えています。どちらかだけを強調するのではなく、主が家を建て、主が町を守ってくださることを信頼しつつ、建てる者の働き、守る者の見張りをしっかり果たすことが大事なのです。

救いは神の恵みのみによります。行いが救いに役立つではありません。また、建てる者が働くこと、守る者が見張ることをしっかりできるのも神の恵みと助けによることです。そういう意味ではすべてが神の恵みなのですが、神の恵みに応答して、また神を信頼して、私たちが行うことも必要なのです。そのように私たち信仰者には、「神に信頼しつつ、全力を尽くす。できることを行いつつ、神に委ねる」という態度が大事なのです。

窮地に立たされた中でも、このようなヨアブの勇気と信仰に励まされて、イスラエルの軍勢は戦いに向かいました。ヨアブと精鋭たちがアラム人に近づいていくと、アラム人は逃げました。寄せ集めの傭兵たちだったために一つにまとまっていなかったのでしょう。そして、アラム人が逃げてしまうと、アンモン人もアビシャイと軍勢の前から逃げて町に入りました。そこでヨアブとイスラエルの軍勢はエルサレムに帰りました。

3. アラム人との戦い (: 15～19)

逃げて行ったアラム人は収まりません。再び集結して、イスラエルと戦おうとします。15～16 節。ツォバの王ハダドエゼルがユーフラテス川の向こうまでの広い範囲のアラム人の王たちに呼びかけて、軍勢を集結させます。そして、アラム人の軍勢はヨルダン川の東側の北部にあったと考えられるヘラムに集結しました。

このことを聞いたダビデは、イスラエルの全軍を集結させ、アラム人と戦いました。結果は再びイスラエルが勝利しました。18 節。イスラエルの圧倒的な勝利でした。そこで、アラム人はイスラエルと和を講じ、イスラエルに仕えるようになりました。アラム人はそれからはアンモン人を助けようとはしませんでした。

ダビデがハヌンに真実を尽くそうとしたことから続いた一連の出来事は、思わぬ方へと向かいましたが、戦いの結果、アラム人の広い地域もダビデの支配下になりました。しかし、サムエル記のこの箇所の記事はダビデの勝利を伝えることが目的ではありません。次の 11 章に記されているように、戦いの勝利が続く中で、ダビデが大きな罪を犯してしまうことになる舞台となっているのです。

ダビデはハヌンに真実を尽くそうとしましたが、その思いは通じませんでした。思慮深く相手のことを考え、疑念を持たれないように、自分の良き思いを表すことが必要だったのでしょう。私たちの場合も、単純に真実を尽くせば良いということではなく、相手との関係を見極めて行動できるように、祈りと知恵が必要であることを思います。

それでも、良き思いを受け入れてもらえないことがあったとしても、恵み深い神に倣って、真実を尽くすことをやめてはならないことも教えられます。

ハヌンは間違った忠告を受け入れ、また過ちを認めず、戦いに向かいました。自分を守ろうとして戦うのではなく、過ちを認めて平和をつくることを求めるようにと教えられます。

ヨアブは窮地に立たされる場面でも、勇気を持って全力を尽くして戦いに臨みつつ、主への信頼と主に委ねる信仰に立っていました。私たちも、神への信頼と人の努力のどちらかだけを強調するのではなく、信仰者の歩みには、神に信頼しつつ、全力を尽くすことが大事であることを教えられます。

このようなことに限らず、聖書を通して神は、今の私たち、それぞれの状況に応じて、ふさわしい対応、信仰者としてのあり方を教えてください。ですから、私たちは祈りつつ、みことばに聞いていきましょう。